

NID News

Latest News
Nagaoka Institute of Design

June 2011 Vol. **010**



被災地支援 × デザイン

防災こそ用・強・美が 兼ね備わっている必要がある

日本は世界でも有数の自然災害頻発地帯です。特に地震と津波（この言葉は世界共通語として使われているほどです）は、まさに日常と隣り合わせともいえます。

そのため、防災対策は実に様々な取り組みが行われてきました。特に戦後、伊勢湾台風以降は公が中心となり、土木的な防災対策が講じられてきましたが、これはきわめて工学的でした。災害の規模を予測し、それに負けない対策を講じることに主眼が置かれてきました。まさに用と強の併存です。しかしながらかつて日本では、それに加えて「美」を兼ね備えた対策も行われています。たとえば治水対策としての「信玄堤（霞堤）※」とよばれるものが代表的です。現在でみれば技術的には卓越したものではありませんが、日常生活を阻害しないように丁寧に講じられたその対策は、今を持ってなお価値のあるものです。

特に東日本大震災では、技術偏重の防災対策に限界があることが露呈しました。既往最大を一つの対策基準として講じられた土木構造物が、その限界を超えたとき、予想以上の被害をもたらすことが明らかとなったのです。やはり人の知恵を活かし、デザインマインドを持って「用・強・美」を兼ね備えた防災対策を講じていくことが、21世紀、持続的な社会づくりには欠かせません。その点からみると、デザインの重要性は今後ますます増大するばかりです。

「おもい」を カタチにするということ

いわゆる被災地では、日々の生活を支えてきた多くのものが失われます。そこからの復旧・復興はまさに「日常性の再獲得」への歩みとなります。

とはいえ、被災直後の大きな混乱の中、災害が起こる前の生活に戻りたいという被災者一人一人の小さな願いも、緊急事態であるということで胸の奥にしまい込まなくてはならない状況となってしまいます。大きな被災直後は身分・地位・経済的環境を超越した助け合いの場、「災害ユートピア」が表出すると言われていますが、そのような状況下でも「美しいもの」「きれいなもの」「かっこいいもの」は無駄と言わんばかりの雰囲気醸成されてしまいます。

しかし、阪神淡路大震災でボランティアが避難所の女性に化粧品を送り届け、それが何よりも喜ばれたという事例が示すように、そのような美しいもの、きれいなものへの欲求が無くなるわけではありません。被災地、被災者に対して失われたものは食料や住居、衣服だけではなく、「デザインされたもの」でもあるのです。

また、生活再建、まちの再生に至るプロセスの中にもデザインが必要とされるタイミングがあります。人々の思いを形にする作業です。それはビジョンでも求められずし、空間を再構成するタイミングでも求められることとなります。ソーシャルデザインが今まで以上に必要となる時代となったといえるでしょう。

美しいものを 送り届けること

すでに本学学生が被災地にボランティアとして入っています。最初はがれきの撤去など一般的にボランティアの助力を必要とするステージでの活動となっています。しかし彼らがあの壮絶な現場で経験したことは、今後地域を支援していくときの大きな力となるし、デザインマインドを持った彼らができることはきわめて大きいと思います。

また、心に傷を負った多くの被災者に、ものづくりのワークショップなどを通じて、作ることの楽しさ、生み出すことの大切さを実感してもらうことは、今後長い道のりとなる復興に向けた取り組みを、より前向きなものに変える力を持っています。

長岡造形大学は7年前の中越地震被災地です。中越の復興には本学の存在、活動は欠かすことができなかつたといえます。それは具体的な造形物だけでなく、復興ビジョンや移転計画、そしてその後の集落復興のための人的支援など多岐にわたっているからです。その経験は東北でも求められているのだと思います。

※信玄堤：山梨県甲斐市にある堤防。川の両岸に、川の流れに対して「逆ハの字」の堤を重ね、水害への備えをしている。



澤田 雅浩（さわだ まさひろ）

建築・環境デザイン学科准教授
復興支援センター・センター長
慶応義塾大学大学院政策・メディア研究科後期博士課程
満期退学 博士（政策・メディア）
主な著書：
『大震災15年と復興の備え』
『巨大地震災害へのカウントダウン』
『都市防災学』（各共著）など

●中越地震の被災地域とNIDの関わり 教員や学生の主な活動

①



②



①

集落全世界の屋号をいれた、
ワク照明の制作（旧小国町法末集落）

②

棚田をモチーフにデザインした、
丑末洞門看板の制作（旧小国町法末集落）

③

新潟県立歴史博物館企画展
「山古志ふたたび展」にて
展示された地形模型

④

被災地の歴史や自然などを紹介する、
震災復興トレッキングマップ



③

④

ボランティア活動報告

5月21日（土）・22日（日）

宮城県気仙沼市内（NPO法人国際ボランティア学生協会主催）

私は高校時代にも災害ボランティアを経験し、その中でボランティアの重要性や学生が被災地へ足を運ぶことの大切さを学びました。

今回向かった被災地では、まだまだマンパワーが足りず、瓦礫の山などが多く見受けられました。被災地では人にしかできない作業がたくさんありますが、実際にはボランティアをする人の数は減りつつあります。もっとこういったボランティアの情報を発信し、より多くの人に知っていただくことは、少しでも早い復興に繋がっていくと思います。

僅かな力かも知れませんが、学生たちそれぞれが学んでいることを活かし、できることがたくさんあると思います。今後もこういったボランティア活動を続け、デザインや建築でできることは何なのかを考えていきたいと思っています。



中島 大貴
建築・環境デザイン学科2年



私は東日本大震災の様子をテレビで観て、自分も何か役に立ちたいと思い、今回のボランティアに参加しました。

ボランティアに参加し、実際に被災地を見て改めて自然災害の恐ろしさを感じました。そして、災害が起きた場合により安全に落ち着いて避難ができるように、避難経路のサインなど、私が今学んでいる視覚デザインの分野でも貢献できることがあると思いました。これからもボランティアやデザイン活動を通じて、災害復興に貢献していきたいと思っています。



大堀 楓
視覚デザイン学科1年



近藤研究室の楽しい仲間たち



学生の頃 / 20歳



仲畑広告の頃 / 28歳



事務所で、もくもくと仕事をする渡邊さん

デザイナーの職業を志したのはいつごろですか？

学生時代20歳くらいの時は、映画美術の世界に入りたかった。もっとというと特撮美術をやりたいかった。東宝特撮映画の美術をやりたいかった。成城の東宝スタジオに何の約束もなく、ポスターパネルを両脇に持てるだけかかえて、売り込みに行ったりもしました。(守衛さんはなぜか入れてくれたのですが、美術部で門前払いでした。当たり前ですが)

その帰り、円谷プロダクション(故・円谷英二氏創設のプロダクション)にも売り込みに行き、運良く、若いスタッフに会っていただきましたが、この馬の骨かわからない、こんなむさくるしい男を雇ってくれるはずもなく、とぼとぼ帰ったのをよく覚えています。

ちょうどそのころ田中一光デザイン室のアルバイト募集があり、学校の先輩の口利きで入ることができました。そこで、学校とは全く違う方法論でデザインが完成されていくことに驚きました。とても厳しかったですが、とても楽しい、本当に充実した輝く毎日を過ごさせていただきました。

実はこのことがデザイナーになろうと思った最大の理由で、今日があります。

わたくしはどちらかというと広告のデザインを中心に仕事をしていますが、あくまできっかけはグラフィックデザインであり、広告は、当時、コピーライターの巨星たちがつぎつぎに現れ、影響され、感化され、広告デザインの方向に進んだ感があります。

先生は学生のとき、どのような事に夢中でしたか？

正直、何かに夢中ということではなく、型にはまるのが嫌で、自由気ままにやっていました。実力も経験もないのに自分自身を過信し、夢みがちで向こう見ずな学生でした。

ただ、当時から授業とは関係なく、ほとんど全滅ですが、デザインコンペには夢中で応募していました。

これまで携わってきたデザインの中で印象的だったものはどんなものですか？

自分が携わってきたデザインではなく、学生作品もふくめ、自分にはけっしてできない、デザインすべてが印象的です。

広告をデザイン・制作する際はどのようなことを考えていますか？

また賞についてはどのようにお考えですか？

広告は一瞬の勝負です。まずは見てくれないといけない。伝わるスピードを大切にしています。

企画では、まずはクライアント(広告主、依頼主)の要望どおりに企画し、次に、まったく予想外な、視点を変えた企画も同時に提案するようにしています。たとえその予想外企画がポツンになっても、その方が提案する側もされる側もワクワクするし、提案の場が楽しい。

賞に関しては、仕事の評価であり、クライアントの評価であると思います。

賞が獲れれば、制作者のひとりとしてももちろん嬉しいのですが、グラフィックも広告もデザインは、まずは消費者に喜んでいただく。その結果、クライアントが喜ぶ、そして制作者も嬉しい、さらに賞もいただく、みんなで乾杯。といったようなことだと思います。

賞を狙って最初から作ることもありますが、クライアントの理解が必要ですし、あくまでもクライアントありきではないでしょう。



近藤 忠 (こんどう ただし)
視覚デザイン学科教授
新潟生まれ
武蔵野美術短期大学専攻科
商業デザイン専攻卒業
(株)日本デザインセンター、(株)スタンダード通信社、(株)仲畑広告制作所を経て、1990年近藤忠デザイン事務所設立 (www.kondo-design.com)
2011年より長岡造形大学に着任
毎日広告デザイン賞(公共福祉広告の部)最高賞、東京ADC賞、
毎日広告デザイン賞(広告主参加作品の部)最高賞、受賞

ただ、若い人のトライアルなコンペは、最高の賞を目指してどんどん応募して、がんばってもらいたく思います。

学生に向けてメッセージをお願いします！

少し照れくさい言葉ですが、「夢」と「希望」をもって進んでください。いろいろ不安な時代ではありますが、そういうことが実現できるよい時代に生きていると思います。

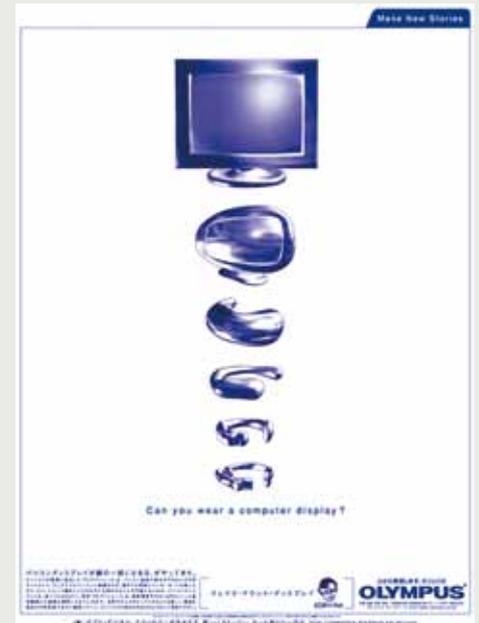
〈近藤忠デザイン事務所が携った仕事の紹介／新聞広告・ポスター〉



毎日新聞(公共福祉広告)／P.江成常夫D.近藤忠C.豊田充徳



IHI 企業広告／企画・制作＝電通＋近藤忠デザイン事務所



オリンパス企業広告／
企画・制作＝電通＋近藤忠デザイン事務所



新日鉄企業広告／企画・制作＝電通＋近藤忠デザイン事務所



新日鉄ソリューションズ企業広告／
企画・制作＝電通＋近藤忠デザイン事務所



キリンビール企業広告／
企画・制作＝電通＋近藤忠デザイン事務所



スキップ・クリスマス／企画・制作＝東急エージェンシー＋近藤忠デザイン事務所



サントリーフラワーズ／企画・制作＝サントリー宣伝部＋電通＋近藤忠デザイン事務所

家電のデザイナーになりたい！

自分が関わった製品を店頭に並べることが夢です。
“人々の生活が豊かになるような製品”を
考えられたらいいと思っています。



こんな高校生でした

部活の友達とよく遊んでいました。

高校3年生のときに長岡造形大学のデザイン教室に参加してからは、高校でも少しずつデザインをするようになりました。

熊谷 陽太 (プロダクトデザイン学科 プロダクトデザインコース 3年)

今、こんなこと
頑張っています

身の回りにある工業製品をメインにデザインしています。毎日大学で夜遅くまで、課題のアイデア出しや作品制作に取り組んでいます。完成度を高めようとすると時間がいくらあっても足りないくらいです。

昨夏には企業のインターンシップに参加し、実際のデザインの現場を体験させていただきました。ますますモチベーションが上がっています。



左/「Shower」(課題作品)ユニバーサルデザインの調味料入れ。
右/木でつくる照明(課題作品)「動き」をテーマにして制作。

夢をカタチに 高校時代・いま・将来

こんな高校生でした

高校生のころは写真部に所属し、写真を撮りまくって
いました。好きなことにはとことん熱中する性格です。

今、こんなこと
頑張っています

ワークショップ

積極的に様々な活動に参加するようにしています。
大地の芸術祭の「里山カーゴ」(移動標本車)や舞台芸術
ワークショップ、燕三条ビジネスアイデアコンペなど
に取り組んできました。

特にイギリスのAAスクールの学生と十日町の廃校
で共同生活をしながらのワークショップはとてもいい
経験になりました。ワークショップは、モチベーション
の高い学生に出会えるので刺激になります。また、
違う分野を勉強している学生から学ぶことが多くあり
ます。例えば建築系の学生からは、アイデアを様々な
方向から検証する姿勢や熟考力を学びました。逆に、
視覚系の私はアイデアの量と出すスピードを褒めても
らったりと、自分の強みも発見することができました。

グラフィックデザイナーが目標！

ずっと見る人になじんでいくような、
いい意味で“自分のにおいがいいデザイン”
が出来るようになりたいです。



阿部 未加子 (視覚デザイン学科 ヴィジュアルデザインコース 3年)

ロゴマーク制作

現在取り組んでいることは「高等教育コン
ソーシアムにいがた」のロゴマーク制作のお
手伝いです。パソコンがあっても、手を動か
して描くという作業の大切さを学びました。
最後までやり切り、もっと多くのことを学び
取りたいです。

インターンシップ

春休みに大阪のデザイン制作会
社にインターンシップに行かせて
いただきました。

仕事となるとスピード感が全然
違うのでとても戸惑いましたが、
クライアントの方が喜んでいた
という話を聞いてとても嬉しく思
いました。インターンシップのおか
げで技術の前にまずは体力と根性
が大切だなと感じ、今体力作りに
励んでいます。



普段持ち歩いているアイデアスケッチ

紙漉き

和紙でつくった髭がおちゃめです



代表 / 田中 里奈 (視覚デザイン学科3年)

小国和紙生産組合さん協力のもと、和紙を漉いたり、漉いた和紙を使って小物作りをしています。

夏には小国へ合宿に行きます。合宿では小国の工房でしか漉けない本格的な大きな和紙を漉くことができます。

秋には和紙の原料となる楮（こうぞ）の収穫をお手伝いしたりもします。和紙作りの工程を知ることにより素材の活かし方や、一から作ることの楽しさを知ることができます。



ココがイイ

和紙の漉き方を直接職人さんから指導していただいたり、貴重な楮を使わせてもらったり、本格的な紙漉きを体験できます。和紙を通して様々な分野の方と触れ合える楽しいサークルです。



大学祭では毎年“手作りのアイデア雑貨”を販売。

CAMPUS LIFE

NIDの“ものづくり系”サークル紹介

授業時間外も気の合う仲間とワイワイものづくりを楽しんでいます。皆さん一緒にやりませんか？



陶芸で器や置物をつくる部活です。土を使いながら、彫りや絵付けなどの様々なジャンルを体験することができます。また、作品としてだけではなく、作ったものが実際に日常生活で使えるのが最大の魅力です。色をつけたり、焼くことにより自分でも思いがけない出来上がりになります。完成した器を手にする瞬間はとても感動しますよ。

器皿工房

お気に入りの器を持ってニコリ



代表 / 西片 結花 (美術・工芸学科2年)



ココがイイ

学内の教室のほかに、陶芸の講座を開講している大学の市民工房を借りて活動。充実した設備で作品作りにも熱が入ります。長期休暇には学外の工房へも出かけたりするなど、とても活発な部活です。



ユニークな先輩と一緒にオリジナル作品をつくりましょう

就活通信

学内合同企業説明会

1月27日(木) 午後、学内合同企業説明会を開催しました。竹中工務店、アークベルなど県内外からデザイン職に採用意欲のある企業を中心に22社の採用担当者にお集まりいただきました。

これに対して、約150名の学生が参加し、終了時刻ぎりぎりまで熱心に話を聞いたり質問する姿が見られました。

今年度も1月末頃に実施の予定です。



学生の声

「デザイン関係の企業が多く参加しているため参考になりました」

「他の合同企業説明会では見かけない企業が多くてよかったです。様々な企業を知るのに役立ちました」

「今まで興味がなかった企業でもデザインに関する仕事が思った以上にあり幅が広がりました」

「学内での説明会ということもあり、落ち着いて、詳しくお話を聞けたのでよかったです。質問もしやすく、企業のイメージをしっかりと理解することができました」

採用担当者様の声

「個性があり、面白いと思う学生も少なからずいました。」

「大変多くの学生が来ていただきありがたかったです」

「意欲的に質問していただいて、非常に良い印象を受けました」

「学生とじっくり話すことができ良かったと思います」

「媒体への未エントリーの学生にも訪問していただき、学校の就職ご担当者様や教授の熱心な取り組みによるものと感じました」



平成22年度3月卒業生の進路について

厳しい就職状況が謳われた平成22年度ですが、本学学生は善戦し、就職者数は前年比11名増の120名、就職率は前年比6パーセント増の75.5パーセントとなりました。

就職率増加の要因としては、超氷河期といわれた就職環境に危機感を持ち、早期に活動開始する学生が増えたことが大きいと感じています。また、大学も就職進路開発センターのスタッフを増員し、就職活動真っ最中の4年生を支援するための講座を充実させるなど就職支援に力を注いできました。

残念ながら卒業時に就職を決定していなかった方については卒業後も支援を継続しており、時折、「就職が決まりました」という嬉しい報告も受けています。

今年度も、一人でも多くの学生が進路を決定できるよう、大学教職員一同、学生のみなさんと一緒に頑張ります。



保護者向けガイダンスのご案内

在学生の保護者の方を対象とした教務・就職ガイダンスを今年も実施致します。

本学の履修制度や成績表の見方について、今年度の就職状況や本学の就職支援体制などをご説明します。

日時：2011年9月11日(日)

※当日は個別面談も受け付けます。

表紙写真： 緑が深まるころ、庭園にはバラが広がる。キャンパスを取り囲む庭園は、景観を活かしながら周辺施設との調和に配慮され全てがデザインのお手本。自然の中からも新しいひらめきが日々生み出されていく。背景には1年生の学び場である第3アトリエ棟が映る。
撮影 / 松本明彦 (視覚デザイン学科教授)

